

家庭との連携・家族支援のポイント

保護者の意識の変化

「私たちは公教育を受ける権利をもっている。その権利を最大限公使したい」との思いが保護者に強くなっています。

教師の意識変化を！

教師はサービスの提供者としてしっかりとした丁寧な教育実践を行う必要があります。教師にとって保護者は協力者にもなり評価者にもなる存在です。

保護者に適切に伝える、保護者のニーズを実践に生かす
対応がこれからは切に求められます。

ポイント1 教師が保護者と信頼関係を獲得するために、良好な「人間関係を形成」します

教師の開示すべき3つの情報

教師の教育実践に関する考え方と展開する方法を明示する

学期始め：「授業の中にグループ学習を積極的に取り入れます」

：「漢字や基礎的計算などは、朝自習の時間にも計画的に取り組みます」

日常の教育実践の様子、子どもたちの学級生活の様子を定期的に伝える

学習や運動で目立つ特定の子ども様子だけでは不足

学級集団全体の様子、状況が見え、保護者がイメージできる内容で伝える

：休み時間を過ごす様子、クラブ活動の様子

：給食時などのトピックス - 好きな献立ベスト5

節目ごとの成果を示す

学期、学年末に、ある程度の資料を用意して教育実践の成果を伝える

漫然とした振り返りや良い面だけ選んだ情報開示

学習や人間関係など数値化してグラフに示す等 保護者が理解しやすい方法で

マイナス面 → 具体的な対策の提示「以後、こういう方法で対応します」



情報開示は全員の保護者に均等に！（保護者会で、学級通信、文書で）

保護者が教育実践方針、学級の様子、友達関係などを知らないとなら保護者会

への参加意欲が低下 参加者の少なさ 構えた態度、しらけた雰囲気

教師に対する疑問が保護者にくすぶる 学級内の小さな出来事に対し、

教師への強い批判が表出

個別連絡は教師側からこまめに行う

保護者のニーズを獲得する（学級通信の保護者記入欄、参観アンケートなど）

・教師が保護者の要望を取り入れようとしている姿勢を伝える

・結果を整理して保護者たちの主要な要望を全体に開示する

・要望を取り入れた実践の成果を節目ごとに全体に伝える



保護者の安心感

自分の子どもが教師に常に気にとめて
もらっている 教師に対する信頼感へ

ポイント2 保護者からの訴え、感情を適切に受け止め寄り添います

不適切な初期対応

保護者：「C君の母親に、C君が乱暴するので、うちの子が学校に行きたくないと言っていることを伝えようと思います」

担任A：「確かにC君は乱暴な子ですね。実はクラスでもいろいろと問題を起こしているので知らせることが必要かも知れませんね」(批判に同調)

担任B：「やめた方がいいでしょう。(C君の母には)分かってもらえませんかよ」(安易な反対)

担任C：「どうするかは、親同士でよく話し合ってください」(突き放し)

担任D：「私からお話しておきますよ」(安請け合い)

担任E：「お宅のお子さんにも悪いところがあると思いますよ」(攻撃)

保護者の不信感、否定的な気持ち、怒りの感情 問題が複雑化

保護者の感情を理解するカウンセリングの原則から外れています

担任や学校の立場を悪くします

初期対応 - 誠実に聴く(保護者の気持ちを受け止め丁寧に聴く)

玄関にスリッパを用意する、管理職が出迎える

「わざわざ足を運んでいただきありがとうございます」

面談場所は校長室。お茶を出す

「なるほどそう感じたのですね。それはご心配ですね」(共感的に聴く)

「おかげさまでA君の家での様子が分かりました」(情報提供に対する感謝)

「お母さんに大変なご苦勞をおかけしてすみません」(相手の感情を認め、ねぎらう)

「子どもたちからもう一度話を聞いていきさつを確認します」(具体的な対応の約束)

「もう少しお時間をいただけるとありがたいです」(猶予の申し出)

「直接お会いしてももう少し詳しくお聞きしたのでご都合はいかがでしょうか」

「明日の 時か、明後日の 時であれば、ゆっくりと時間を取ることができます」

(次回の面接の約束)

保護者が納得できない場合

どのような対応を教師に期待しているのか質問する

- ・教師が受け入れられる時 具体的な対応策の検討
- ・教師が受け入れられない部分がある時
「他の子どもたちの～という反発が予想されますが、それにはどう対応すればいいでしょうか」
「ご家庭ではどのように対応されていますか」



教師と保護者が連携して対応していくことを確認する

保護者と教師の連携・協同とは

保護者 = 子育ての専門家

教師 = 教育の専門家

子どものために「同じものの見方」、
「同じ方向で援助」することが必要

同じ立場
の援助者